Pole Pole ケニア通信

2025.2

JICA 海外協力隊（環境教育） 和田温子

こんにちは！今回は【大学でのごみ分別推進活動】について紹介します。

ごみ分別の推進

小中学校の他に、私はエンブ大学でも活動をしています。エンブ大学は配属先の近くにある、国立の大学です。元農場だったという敷地は、自然豊かで環境にとても恵まれています。池が 5 つもあったり、牛や鶏を飼育していたり、森や草原もあり、まるで広い公園のようです。エンブ大学は最近、分別ができるカラーごみ箱を導入しました。しかし、私がチェックしてみると、実際はまったく分別はされておらず、どのごみ箱の中身も同じになっていました。ケニアではごみを分別する習慣がなく、ひとまとめにごみ箱に捨てることが普通で、ごみを分けたとしても回収時にまとめられてダンプサイトに運ばれて終わり、になってしまいます。タウンのような人が多い場所ではごみ箱どころか、ポイ捨ても一般的です。しかし、大学内はタウンとは違い、環境整備のコントロールがしやすい環境にあります。そこで、大学が導入したごみ箱をより生かすために、ごみ分別の推進について大学側に提案し、一緒に進めることになりました。

ごみ分別がうまくできていない大きな要因は、どのごみがどの分別にあたるのかを学生が理解していないことが挙げられます。分別が日常的ではないため、ごみの種類や具体例についても広く知られている訳ではありません。その上、ごみ箱には「Recyclable（リサイクルできるもの）」という文字表記しかなかったため、さらに分かりづらいものになっていました。そこで、「Recyclable」「Biodegradable（生物分解するもの）」「General waste（その他）」の 3 種類のごみについて、具体的なイラストを入れたラベルを作成しました。作成にあたっては、どのごみを例として示すか、大学スタッフとよく検討しました。プリンターの故障で印刷がなかなかできず、予定よりも大幅に遅れましたが、ラベルを一部のごみ箱に設置しました。現在は毎週、モニタリングをしています。

嬉しいことに、ラベルを設置してから概ね分別がされるようになりました。ごみ箱の形にもよりますが、ラベルが見やすい位置にあり、ごみ箱がきちんと3つ並んでいる場所ではうまく機能しているようです。分別がきちんと継続できるようになれば、リサイクルをするという次の段階に進むことができます。まとまった資源ごみが用意できれば、ナイロビから回収に来てもらうこともできます。また、生ごみは大学内でコンポストにして、できた肥料を大学内の畑で使用することが理想です。まだ道のりは長いですが、少しでも実現に近づけるようにボランティアとして手助けをしたいと思っています。

①

②

③

① 大学スタッフとともに、ごみ箱にラベルを貼る作業をした
② ラベルを貼ったごみ箱の一例。大学内はごみ箱が点在しており、形もバラバラ。このように3種類の同じごみ箱が一か所にまとまっていることが理想で、この場合は分別がしやすい
③ 売店の近くは、ごみが散乱しがち。特に段ボールの捨て方が課題である。日本のように開いて畳む習慣がないため、すぐにごみ箱があふれてしまう